

緩和ケア病棟「ホスピス徳島」 開設10周年記念



Dusk view of Kondo hospital

医療法人若葉会近藤内科病院 夕暮れ時の前景



1. 院長あいさつ	1
2. スタッフあいさつ	2
3. 「ホスピス徳島」10年間の歩み	7
4. 「ホスピス徳島」の空間	9
5. 彩り食	11
6. 緩和研修受け入れ実績	12
7. ボランティア活動	14
8. NPO法人ホスピス徳島がん基金	17
9. 徳島がん市民セミナー	18
10. 第26回日本臨床内科医学会～市民公開講座～	22
11. ホスピス緩和ケア週間 in Tokushima	27



医療法人若葉会 近藤内科病院 院是

私たちは医療技術と心を磨き、
患者の皆様が常に最良の医療が受けられるように全力を尽くします

- ・ 命の質（QOL）を高める医療
- ・ 患者・家族の皆様が安心できる医療
- ・ 職員が楽しく働ける医療
- ・ 社会の進歩に貢献できる医療



ホスピス・緩和ケア病棟開設10周年をむかえて

院長 近藤 彰

平成14年5月にホスピス・緩和ケア病棟「ホスピス徳島」を開設して10年が経ちました。この間、私たちは多くの患者・家族の皆さまに支持され信頼されて診療を行ってきました。そして、実に多くのことを学ばせていただきました。患者・家族の皆さまと、患者さんをご紹介いただいた先生方に深く感謝しております。誠にありがとうございました。

「ホスピス徳島」開設にあたり多くの患者・家族の皆さまから多額の寄付をいただきました。この寄付金はホスピス徳島の快適なお風呂やピアノなどの購入にあてさせていただきました。さらに平成19年には寄付金を原資にNPO法人「ホスピス徳島がん基金」が設立しました。この「がん基金」はホスピス徳島の入院環境の充実、医療者のホスピス緩和ケアの研修、ホスピス緩和ケアの啓発・普及活動などを行っています。

約15年前は、私は亡くなった患者さんは皆さん穏やかなお顔であることに気づきました。小春日和の中、エジプトとマレーシアから徳島大学に留学中の医師2人と往診していた時、脳卒中で療養中の患者さんが亡くなりました。その時、「あなた方のお国でも皆さんこのように穏やかなお顔で亡くなられますか」と問いかけたところ、マレーシアの女性医師は「そうです同じです、英語でPEACEFUL FACEと言います」と答えました。この10年間約1300名の看取りにおいてもお亡くなりになった患者さんはすべてPEACEFUL FACEです。私はこのPEACEFUL FACEの意味するものはなにかと考えてきました。一昨年、死の臨床研究会全国大会（盛岡）でアカデミー賞「おくり人」の原作者である青木新門さんの講演を聴き、PEACEFUL FACEは残された家族が新しく出発ができるためではないかと考えております。そのため、私たちはご家族に臨終期にはなるべく多くの親族が集まるようにお勧めしています。

以前のわが国では、親の臨終には子供・孫・兄弟など一族一党が集まるのはあたり前でした。しかし、最近の10年、この良き風習が損なわれ、家族の力は脆弱化しているようです。この家族の力の脆弱なことが社会の活力の低下につながっているのではないのでしょうか。身内のPEACEFUL FACEを家族の皆さまが見て、亡くなられた方に感謝することで残された家族が新しく出発する力にしていきたい。ヒトが亡くなることがいのちのバトンタッチになるようにと考えています。

今後、近藤内科病院は原点に戻ってホスピス緩和ケアを緩和ケア病棟のみならず急性期病棟、さらには在宅においても提供できるように、スタッフの充実と病院のシステムを整備してまいります。また、ホスピス緩和ケアを非がん患者の皆さまにも提供できる体制にし、神経難病、重症の心不全・呼吸不全・肝不全・腎不全・認知症の患者さんを受け入れてまいります。



近藤内科病院緩和ケア病棟「ホスピス徳島」の 10年間を振り返って

緩和ケア病棟長 荒瀬 友子

平成14年4月に緩和ケア病棟「ホスピス徳島」が徳島県で初めてのホスピス緩和ケア病棟として開設されて10年が過ぎ、千名を超える方々の看取りをさせていただきました。その後、まだ徳島県下では新しいホスピス緩和ケア病棟ができていないため、四国の中でも最もホスピスベッドの少ない県となってしまいました(2.5床/人口10万人当り)。現在でも徳島県で唯一のホスピスとしてその役割を担っています。

この10年あまりで当ホスピスでも様々な変化、出来事がありました。平成17年8月にホスピス緩和ケア認定ナースが誕生し、平成19年4月にそれまで1人であったホスピス専任の医師が2人になり、平成19年9月にNPO法人ホスピス徳島がん基金が設立されました。さらにこの年より世界ホスピス緩和ケアデーに合わせて、日本でもホスピス緩和ケア協会の呼びかけで世界ホスピス緩和ケアデー(10月第2土曜日)を最終日とする1週間をホスピス緩和ケア週間として全国で各種イベントが計画されるようになりました。徳島でもがん市民セミナー、「ホスピス徳島」緩和ケアガーデンでの前夜祭や、県庁、各病院でのパネル展を毎年行うようになり、今までで5回目のイベントが行われました。また、平成18年に制定されたがん対策基本法に基づき、平成20年8月からは「がん診療に携わる医師に対する緩和ケア研修会」が開催されるようになり当院からも企画から講師等の実施に参加協力しました。平成21年5月にはホスピス緩和ケア認定ナースが2名となって看護面での充実が図られています。また、ティーサービスや季節の行事に重要な役割を果たしているホスピスボランティアの皆さんの活躍も徳島大学や文理大学の学生ボランティアが加わって更に充実してきています。

教育面では徳島大学医学部におけるホスピス緩和ケアの講義を担当して、医学生、看護学生の実習、ホスピス緩和ケア認定ナースの研修や、卒後臨床研修協力病院として若い医師の研修(H23年度までで計44名)の受け入れも行っていきます。

これからもしくはばらくは徳島県唯一のホスピス緩和ケア病棟としての役割を求められると考えられ、スタッフ一同今後も苦しんでいる皆様の心と身体の苦痛の緩和を目指して日々努力しなければならぬと思っています。



看護部

看護部長 谷田典子

当院に緩和ケア病棟『ホスピス徳島』ができて10年が経過しました。がん患者様やご家族の皆様にも少しでもよい環境で穏やかな時間が過ごせるようにとの思いでスタッフ一同取り組んできました。この間にお会いした皆様とともに喜び・悲しみながらいろいろなことを学び成長できたことを感謝申し上げます。また10年を歩むことができたのはよきスタッフに恵まれ、みんなで考え・学び・協力しあうことができたからだと思います。

これからも『ホスピス徳島』に来てよかったとっていただけるケアを継続させていくことともに、今後の当院の目標である「いつでも」「どこでも」「誰にでも（非がん患者様にも）」緩和ケアが幅広く行われるようにスタッフと協力をしていきたいと考えていますのでこれからもよろしくお願いします。



ホスピス徳島に10年勤務して

緩和ケア病棟看護部主任 佐々木 清美

看護師になり14年、そのうちの11年間を近藤内科病院で勤務させていただいています。

私が緩和ケアに興味をもったのは、看護学生の時です。研修旅行でホスピスの見学に行ったこと、実習中に会った患者様への関わりが大きく影響していると思います。

ホスピスがどういったところなのか、今ひとつ分からないまま見学に行き、銭湯のような浴室・アルコールを提供してくれるラウンジなどまるでホテルのような病棟環境に驚かされました。日曜日には礼拝があり、私の思っていた病院とは全く違っていました。そこで生活する患者様は痛みやせこさを訴えながらも、穏やかな表情で過ごされており、常に患者様のペースで時間が流れていると感じ、いつかは私もこんなところで働きたいなと考えるようになりました。

また、実習中に会った患者様は寝たきり状態で、人工呼吸器を装着している方でした。そんな状況でも調子のいい日はしばらくの間、呼吸器を外し、学生の私に優しく声をかけ得意料理のレシピを教えてくださいました。部屋に行くと、“まっちゃんよ。今日はこのメニューを教えたげるけん、レシピ本にしてよ。これが私の生きがいよ。”とおっしゃってくださいました。

このことをきっかけに“その人らしく過ごせる援助をしよう”という思いを持つようになり、緩和ケア病棟で働くようになりました。

10年間勤務している間に、本当に多くの患者様・家族との出会い別れがありましたが、それらの全てが私にとっては良い学びとなっています。良い看護ができたかどうかはわかりませんが、退院後にわざわざ病棟まで挨拶に来てくださり、大変穏やかな表情をした家族にお会いすることで、私たち看護師も大変救われた気持ちになり、明日からも頑張ろうという気持ちになります。

徳島に1つしかない緩和ケア病棟のため、期待されることも多く、大変なことも多くありますが、地域の方々の期待に応えられるような緩和ケア病棟をめざして今後も看護師一同努力していきたいと思っています。



緩和ケア認定看護師としての10年間

緩和ケア認定看護師 松岡由江

この度、ホスピス徳島が開設10周年を迎えることが出来ました。開設当初から配属され、ホスピス徳島と共に成長することが出来たことを嬉しく思います。

当時はスタッフ全員が未経験の領域に足を踏み入れ、ケアをするスタッフもケアを受ける患者様も緩和ケアに関する知識は浅く、不安や心細い気持ちでいっぱいでした。スタッフ一同、愛情と努力を武器に、残された最期の時を共に喜び共に涙しながら、患者様が最期まで生きていく事を精一杯支えてきました。多くの患者様がこの病棟で最期の誕生日や結婚記念日を迎えられ、久し振りの食事や入浴を楽しみ、様々な季節行事により時の移り変わりを感じる事で、力強く生きている事を実感されたと思っています。そして私たちも看護する喜びを感じ、必ずしも旅立つ事が悲しい出来事ではないことを学ぶ事が出来ました。

がん医療は大きな変革期を迎えています。日本看護協会が、特定の看護分野において熟練した看護技術と知識を用いて、水準の高い看護実践のできる看護師を育成する事を目的に認定看護師制度を発足させました。私も日本看護協会神戸研修センターにて半年間の研修を受け、平成17年より緩和ケア認定看護師として活動しています。日々の看護ケアだけでなく、徳島にもっと緩和ケアが普及し多くのがん患者様・ご家族に適切なケアが提供できるよう啓発活動にも力を注ぎたいと思っています。

これからもホスピス徳島で過ごされる患者様・ご家族が「ここに来て本当によかった」と思って頂ける様、皆様との出会いに感謝し、技術だけでなく心も成長し続けていきたいと思っています。

今後も皆様のご指導・ご支援をよろしくお願いいたします。



緩和ケア病棟担当薬剤師として

薬剤部 岡田幸子

私が当院に入職して4年、緩和ケア病棟に携わるようになって2年がたちました。緩和ケア病棟を担当するようになった当初は、日々の医療用麻薬の管理や注射調剤業務のみを行っており患者様とのかかわりがあまりありませんでしたが、患者様が緩和ケア病棟に入院されてきたときのウェルカムに参加させていただいたり、また患者様や看護師からの要請に応じての服薬指導をさせていただくようになって患者様とのかかわりが少しずつ増えてきていると感じています。服薬指導の機会はまだまだ少ないですが、患者様との会話の合間に笑顔がみられたり、「ありがとう。」などと言ってもらえることが、とてもうれしく感じています。少しでも患者様のお薬に対する不安や疑問をなくすことが出来るようにわかりやすく丁寧な指導を続けていきたいです。今後もよろしくお願い致します。



地域連携室より

地域連携室 宮田 ゆかり

私は昨年より地域連携室に携わり、緩和ケア外来へ相談に来られたご家族、患者様からお話を伺い、関わりを持たせて頂いています。相談に来られる方の症状や年齢、性別、家族環境や経済環境は様々であり、多くの悩みや不安・疑問を抱えておられます。たとえ余命を告げられても、痛みや不安な気持ちと上手に付き合うことができれば、趣味を楽しんだり、家族や親しい人と思い出を作ったりと、一日一日を大切に生きていくことができます。

患者様の中にはご自身が終末期の状態であるにもかかわらず、ご自身の身体的・精神的不安よりもご家族への負担を心配される方もおられます。「ホスピスに入りたいが医療費がかかる。」「家に帰りたいが看病してもらうのは気が引ける。」また、ご家族も「どこで過ごすのが本人にとっていいのだろうか。」「ホスピスに入りたいと言っているが、本当は家がいいのではないか。」とお互いを思いやりながら悩んでおられます。

しかし実際には、「一度決めた場所でずっと過ごさなければいけない」ということはありません。「普段は主治医のいる病院へ通院し、症状が悪化すれば入院しよう。」「訪問看護・往診でケアを行い、可能な限り家で過ごし、その後入院しよう。」「在宅ケアで疲れた家族を癒し、リフレッシュを図るために短期間のみ、ホスピスへ入院しよう。」などと、上手に病院や緩和ケアと在宅ケアとを使い分けることができます。また、医療費などの支援制度もあります。

まだまだ、患者・家族の皆様のお言葉に耳を傾けることに精一杯で教えて頂くことの多い毎日ですが、残された時間をいかに大切に生きるかを考える上で、どのような選択肢が最善のものなのかを一緒に考えていければと思っております。



地域連携室MSWの役割

MSW 四方 研也

私は地域連携室のソーシャルワーカーとして、緩和ケアのチームケアに携わっています。外来受診時から入院療養中までの相談全般について担当しております。そうした相談支援の中で常に心がけているのは、患者さんのように弱い立場にある人が、弱い立場であるために、その人のニーズを満たせなかったり、そのことによって自分らしく生きていくことができなかつたりする状況があれば改善出来るように関わるといことです。

病気になると様々な要因により、本人が望む生活ができなくなってしまうことがあります。それはその人の人としての尊厳が守られていないような状況です。このような背景として、弱い立場の人が、強い立場の人の都合でその行動等が制限されてしまうことがあります。弱い立場である患者本人の希望や意見はどうしても尊重されにくくなります。「病気だから」、「痛みがあるから」、「医師の治療方針と異なるから」、「家族に迷惑をかけるから」などという理由で望みや意見は退けられてしまいます。

そうした場合にソーシャルワーカーは当事者の側に立ち、周囲の人に働きかけ、その人の望みや意見が実現できるように調整します。その人の思うことや望むことが実現できるようにすることが目標としてあります。また、家族に全ての負担がかかることがないように、いろいろな制度を利用できるようにすることも重要になります。

人は、自分のことは自分で決めたいという欲求をもっています。この欲求を尊重し、本人に知らせ、一緒に考え、本人が納得し、そして選択するということが重要なのです。

それらが実現できるようにするためには、弱い立場の方の望みや意見をきちんと聞き、周囲の人たちに伝える専門のソーシャルワーカーという存在は重要だと考えます。意見を言いにくい、そして言っても受け入れてもらいにくい本人の立場に立って、当事者の代弁を行うことが必要なのです。

まだまだ十分に実践できているとはいえませんが、これからも患者・家族の皆様の言葉に精一杯耳を傾け、残された時間をいかに大切に生きるかを考える上で、どのような選択肢が最善のものなのかを一緒に考えていければと思います。

「ホスピス徳島」10年間の歩み ～10年間の実績を中心に～

緩和ケア病棟長 荒瀬 友子

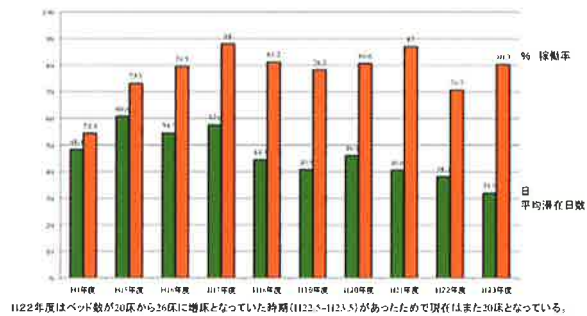
「ホスピス徳島」は10年前に徳島で初めての緩和ケア病棟として開設され、現在もまだ徳島県唯一の緩和ケア病棟である。2002年4月に35床の内科病棟を持つ近藤内科病院に20床の緩和ケア病棟が新設された。この10年間の入院患者動態をみると全入院患者1315名、全退院患者1308名であり内死亡退院は1090名（83.3%）であった。死亡退院患者の統計をまとめて報告する。緩和ケア病棟における死亡退院者数は初年度の70名から昨年度146名と倍増して（図1）、当初54.5%

であった病床稼働率は80.3%に上昇している。平均在院日数は2年目の60.8日から昨年度31.5日に短縮された（図2）。

年度別	死亡退院患者数
平成14年度	70
平成15年度	79
平成16年度	93
平成17年度	98
平成18年度	111
平成19年度	113
平成20年度	112
平成21年度	127
平成22年度	141
平成23年度	146
合計	1090名

(図1)

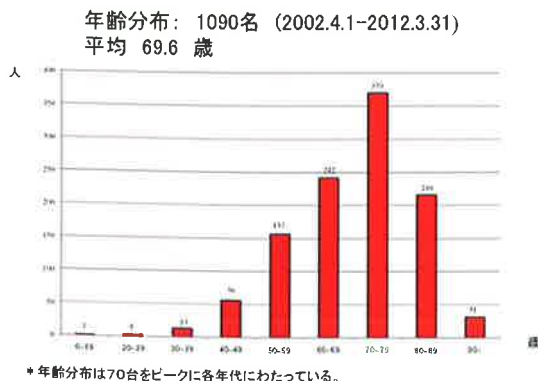
年度別稼働率と平均滞在日数



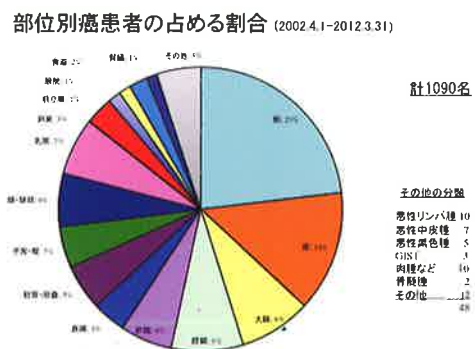
(図2)

平均年齢は69.6歳で、19～97歳の各年代にわたっており70歳代が最も多い（図3）。部位別癌患者の占める割合をみると肺、胃、大腸、膵臓、乳房が多くを占めており、肝臓、頭頸部、胆管・胆嚢、子宮、直腸、卵巣の順となっている（図4）。全滞在日数をみると平均50.6日（1～1729日）で1ヶ月以内が55.5%を占めている（図5）。

昨年度入院患者住所をみると当院のある徳島市を含む東部医療圏75%、南部医療圏21.7%であ

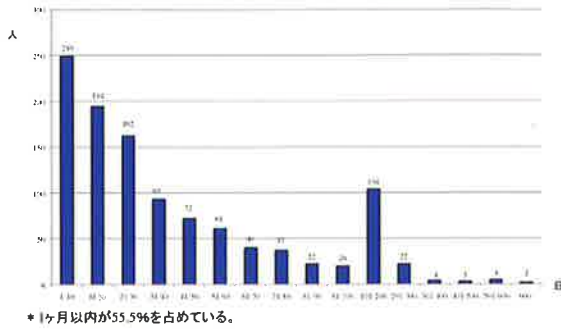


(図3)



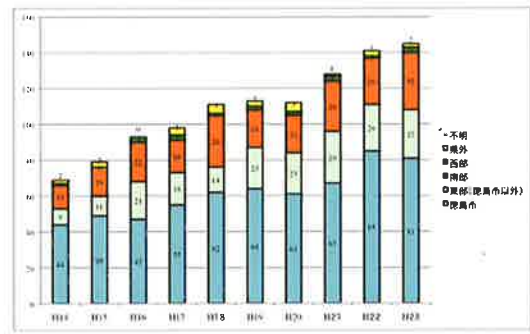
(図4)

緩和ケア病棟滞在日数(2002.4.1-2012.3.31)
平均 50.6 日(1- 1729)



(図5)

年度別入院患者住所



(図6)

るが西部医療圏からは1.7%と非常に少ないのがわかる(図6)。入院患者は90.9%が紹介患者でありその内がん拠点である4病院を含む総合病院が75.5%を占め、医院等からは19.9%となっている。県外からも4.8%が入院されている(図7)。徳島県の平成22年の悪性新生物による死亡数2,538人に対してホスピス徳島では141人(5.6%)と、全国的にみたホスピス死亡患者7.4%に比べても少なく、緩和ケア病棟ベッドの増加、特に県西部に緩和ケア病棟の開設が望まれていた。平成24年9月、徳島県は平成26年に県立三好病院に緩和ケア病棟を開設すると発表し、近い将来には全県下を緩和ケア病棟がカバーできるようになる。

ホスピス徳島入院患者の紹介元

	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	total
院内	7	8	9	8	8	12	15	18	7	4	96
院外	63	71	84	90	103	101	97	109	134	142	994
合計	70	79	93	98	111	113	112	127	141	146	1090
徳島大学病院	15	9	18	21	26	31	29	33	42	37	261
県立中央病院	7	10	12	12	19	12	8	13	17	14	124
徳島赤十字病院	11	23	17	22	27	29	20	25	31	35	240
徳島市民病院	3	9	7	7	4	9	12	10	11	18	90
その他	4	3	2	3	2	1	3	8	3	6	35
総合病院	40	54	56	65	78	82	72	89	104	110	750
医院など	16	15	23	18	18	12	20	20	27	29	198
徳島県内	56	69	79	83	96	94	92	109	131	139	973
徳島県外	7	2	5	7	7	7	5	2	3	3	48
紹介計	63	71	84	90	103	101	97	111	134	142	994
紹介率%	90.0	89.9	90.3	91.8	92.8	89.4	86.6	87.4	95.0	97.3	91.2

(図7)

近藤内科病院「ホスピス徳島」の空間

病院の敷地は1,800坪とゆったりしている。病院南の駐車場は春には桜、泰山木の花に続いて夏には百日紅の真っ赤な花が人々を出迎えてくれる。病院北面のホスピスガーデンは500坪の芝生の庭で、ボランティアのみなさんの手入れの行き届いた花壇で四季折々の花を楽しむことができる。弥生には桜の下でお花見、皐月には鯉のぼりが泳ぎ、夏は蝉しぐれ、秋はホスピス緩和ケア週間に野外コンサートが開かれる。年末には餅つき大会が行われて患者・家族の皆さまの憩いの場所になっている。



野外コンサート



緩和ケアガーデンの雪だるま



オレンジバルーンと野外コンサート

建築は早稲田大学古谷誠章教授の設計である。2004年に日本建築学会奨励賞を当病院の建築で受賞された。古谷教授が1999年の1月の冷たい日曜日に徳島に来られて「ホスピス徳島」の設計を担当したいと希望された。代表作は高知県の「アンパンマンミュージアム」とのことでさっそく見に出かけた。小さい美術館であるが気持ちよく楽しい空間であった。4月、東京桜町の聖ヨハネホスピスを見学した際に古谷さんに設計を依頼した。われわれのリクエストは病院に入ったら病気が治ったような気分になる建物であることであった。

ホスピス徳島は全室個室である。広い病室と広い廊下が特徴であり、病室の広さは厚生労働省の規定の2倍の13~18㎡である。このリクエストに応えた空間になり、明るく広々した病院である。この空間は建築家の意図したとおり、患者・家族間のコミュニケーションの場になり、患者・家族の安らぎの場の役割を十分に果たしている。広いスタッフルームは、譫妄に陥った患者さんや独りでさみしい患者さんが夜間にはベッドごと移動し、同時に2ベッドを収用できる広さである。部屋にあるむき出しのTOTOのトイレは、愛知国際病院の緩和ケア病棟の見学時に、病棟師長さんに勧められたものである。患者さんの病状が進むとベッドはだんだんトイレに近づいて、ずいぶん重宝していただいているトイレである。また、お風呂は工夫して、湯船が上がるタイプのお風呂であり、

患者さんに入浴を楽しんでいただいている。最期の日もお風呂に入られる患者さんもいらっしゃった。パブリックスペースは緩和ケアラウンジと図書コーナーなどでそれぞれ十分に機能している。



ホスピス緩和ケア病棟 広い廊下



室内にあるトイレ



図書コーナー

彩り食

食事は重要な治療の一つであることがこの10年間で明らかになってきました。主治医に「あと1ヶ月の寿命です」と告げられた患者さんが、食べることができると2ヶ月、さらに3ヶ月、6ヶ月と元気で過ごされるのを目にして、ホスピス緩和ケアの現場では、食べることが予後を規定する重要な因子と思われます。そこで、栄養科では食事の工夫を凝らし、「彩り食」と名付けて楽しく食べて頂くようにしております。ホスピス緩和ケア週間でのパネルの周りを彩り食で飾りました。

2011ホスピス緩和ケア週間 in Tokushima



世界ホスピス緩和ケアデー (World Hospice & Palliative Care Day) は期日を10月の第二土曜日として毎年のように世界各国のホスピス緩和ケア関連施設や団体が様々なイベントを開催しています。日本でも10月1日から10月8日の一週間をホスピス緩和ケア週間として日本ホスピス緩和ケア協会が中心となって各地で様々な催しが予定されています。

徳島では10月1日(土)前夜祭「ホスピス緩和ケアの夕べ」と題して野外コンサートを行い、さらに県民の皆様にもホスピス緩和ケアをもっと知っていただくためにパネル展を開催することになりました。ここには徳島で唯一の緩和ケア病棟である「ホスピス徳島」のご紹介や県下の緩和ケアチーム、在宅ホスピスケアの活動をお知らせします。

参加施設：医療法人若葉会近藤内科病院緩和ケア病棟「ホスピス徳島」、徳島大学病院緩和ケア部門、徳島県立中央病院緩和ケア支援チーム、徳島赤十字病院緩和ケアチーム、徳島市民病院緩和ケアチーム、阿南医師会中央病院、徳島住診クリニック、徳島市医師会、ガンフレンド

ホスピスってなあに? - 願っているあなたのために -

日本ホスピス緩和ケア協会編集 NHK厚生文化事業団発行より改変

ホスピスはあなたのオアシス

治すことを目標にひた走っている医師と患者。その同じ病室で、同じ目標を目指せなくなっている私のからだ。途方にくれるたびに私の中の病院砂漠は広がっていき、いつしか私は疲れきった旅人になってしまった。そんなある日、「ホスピスはあなたのオアシス」、砂漠の向こうから吹く風が、そう私に教えてくれた。

みんながわかってくれるから

私がここで安らぐことができるのは、私がどのような状態にあるかということを知っているみんなは分かってくれているから。体が痛むときも、不安に駆られるときも、たとえ家族がいなくても、私を助けてくれる頼もしいスタッフがいつもそばにいてくれるから。

あなたらしさをチーム一丸となって支援します

痛みが和らぐと、私らしさが戻ってくる

あれほどつらかった痛み、そして息苦しさ。何も考えられずに、怒りと不安が波のように押し寄せていた日々。その痛みや息苦しさが和らぐと、怒りはおさまり、不安までが遠のいていく。そうした穏やかな日が続くと、気持ちはずいぶん楽になって、散歩にでも出してみようかしらと、いつもの私らしさが戻ってくる。

からだの痛みを和らげます

私の中のつらい気持ちを、あるときたまたま口にした

心の不安をやわらげます

私を公園に連れてって

穏やかな家族の顔が私を和ませる

悲しいけれど爽やかに

ともに思い出を語り合う

遺族の方がまた元気を取り戻せるように



* 食事は緩和ケアにおいて重要な因子です。

ホスピス徳島では提供する食事を彩り食と名づけています。

「彩り食」色々な料理を一品一品、少しずつ盛り付け、食事に彩を与え、症状や、食欲、嗜好に合わせて食事量を全量、半量、1/4量として提供しています。

「ホスピスってなあに」 -
日本ホスピス緩和ケア協会編集
NHK厚生文化事業団発行より改変



緩和研修受け入れ実績

期 間	研 修 者	研 修 目 的
H15.12.8~H15.12.13	徳島大学病院	ホスピスケア研修
H16.1.21	難病ボランティア講座研修生	緩和ケアについて、院内見学
H17.2.7	富岡東高等学校	体験学習
H17.8.11~H17.9.30	徳島県立中央病院	「ホスピスケア認定看護師教育課程」
H18.2.7~H18.2.8	津田中学校	職場体験学習
H19.3.14、7.27	老人福祉施設協議会	終末期ケアについて、院内見学
H19.8.1~H19.9.30	訪問看護ステーション看護師	在宅ホスピスケア研修（徳島県看護協会）
H19.11.28~H19.12.21	広島原爆病院	広島大学大学院保健学研究科
H20.6.25~H20.7.30	訪問看護ステーション看護師	在宅ホスピスケア研修（徳島県看護協会）
H20.9.22~H20.10.24	大阪府済生会野江病院 特別医療法人栄光会栄光病院	久留米大学認定看護師教育
H20.11.25~H20.12.22	広島記念病院	広島大学大学院保健学研究科
H21.10.23、10.29、11.6	病院看護師	がん専門分野質の高い看護師養成研修
H21.11.24~H21.12.21	広島市立舟入病院	広島大学大学院保健学研究科認定看護師
H22.7.5~H22.7.10	阿南共栄病院	「ホスピスケア認定看護師教育課程」
H22.7.5、7.12、7.26	訪問看護ステーション看護師	在宅ターミナルケア研修(徳島県看護協会)
H22.10.18、10.25	病院看護師	がん専門分野質の高い看護師養成研修
H22.11.1~H22.11.26	徳島市民病院、健康保険鳴門病院	香川大学医学部緩和ケア認定看護師教育課程
H22.11.25~H22.12.20	西條病院	広島大学大学院保健学研究科認定看護師
H23.2.4	富岡東高等学校看護学科1年生	一日体験学習
H23.4.12~H23.4.25	徳島文理大学保健福祉学部	看護学科4年 看護管理実習
H24.4.6~H24.4.25	"	"
H24.7.20	関西看護医療大学	4年 臨地実習

◆◆◆ 医師・医学生のホスピス緩和ケア研修 ◆◆◆

ホスピス徳島では徳島県下で研修している医師の卒後臨床研修を引き受けています。また、がんプロフェッショナル実習としてがん診療に関わっている医師の研修を行っています。

	卒後臨床研修	がんプロフェッショナル実習	医学生実習（社会医学）
平成17年度	6		13
平成18年度	2		2
平成19年度	3		4
平成20年度	3	23	4
平成21年度	16	9	4
平成22年度	10	10	4
平成23年度	4	10	4
平成24年度	7	9	3

徳島大学医学部学生からの手紙

◆◆◆ 近藤内科病院の皆さまへ ◆◆◆

先日はお忙しい中、私たち実習に時間を割いてくださり、ありがとうございました。

実習一日目から、見ることも聞くこともすべてが初めてで、休日や週明けも思い返し、夢にまでみるほど影響を受けました。何人かの患者の「死」にも直面し、人間の「生きる」ということに向きあえた四日間でした。

インフォームドコンセントという言葉はよく耳にしますが、あくまで理想だと思っていました。しかし、緩和ケア病棟の回診や外来を見学し、先生の患者さんやご家族への接し方を見て、患者さんが主役の医療というのは、実践できるものだと感じました。今まで、患者側からの目線しか知りませんでしたので、医師の目線から医療の現場を見ることができたのは、とてもいい体験になりました。

緩和ケアに対するイメージは、この実習を通して、劇的に変わりました。ターミナルケアではなく、『充実して生きるためのケア』であるということ。ホスピスに限らず、一般的な病院や在宅でもできるということ。『こうしましょう、ああしましょうではなく、そうしましょう。』という言葉は、緩和ケアの真髄を表した言葉ですが、患者さんの気持ちを尊重し、それをサポートする医師のあり方をしめす大切な言葉だと思いました。また、医師だけではなく、看護師、薬剤師、放射線技師、管理栄養士、ボランティアの方などのサポートがあって、初めて一人の患者さんのケアができるということを学ばせていただきました。

先生からのお話は、私たちの心の中に響いてくるものばかりでした。今回の経験で感じたことを、臨床実習の場や、医師として患者さんと向き合う際にも、生かしたいと思います。

平成23年12月

徳島大学医学科三年 中西明奈、原田みどり、前田流美、行重佐和香

ボランティア活動

「ホスピス徳島」開設時よりボランティア活動が始まりました。ボランティアの主体は当院で亡くなられた遺族の方々です。ボランティア活動は多岐にわたります。「病棟でのティーサービス」、「カフェコーナーの運営」、「ホスピスガーデンの花の手入れ」、「季節のイベント」、「緩和ケアラウンジでの様々な演奏活動」、「緩和ケアエントランスのギャラリー展」、「週一回の音楽療法」、「病院駐車場の芝生の管理」などです。これらのボランティア活動が、患者・家族の皆さまに安らぎや和みを届けています。ボランティア活動の意義は病院スタッフの想像をはるかに超えるものでした。そしてボランティアの皆さまがボランティア活動が楽しいと言われているのが素晴らしいことです。



平成24年度ボランティア総会

ボランティアの皆さまの声をお届けします。

私達ボランティアはとても楽しくさせていただいています。患者様や御家族の皆さんが喜んで下さる事がとても嬉しく又ボランティア仲間と頑張っていこうと思ひボランティアがこれほど素晴らしい事だと皆さんに感謝致しています。スタッフの皆さんこれからも宜しくお願い致します。
長濱ハル子

継続は力なりと云う言葉どおりティーサービスのボランティアを通じて感じていることです。早くも10年を過ぎました。仲間の皆様とも心を通じ合いながら今日まで自分の持ち場を充実させながら患者様又ご家族様にもホッとされる時間を持っていただきたく日々努力してかかわっていきたくと思っています。
木下禮子

ティーサービスのボランティアに参加させて頂いて1年半余りがたちました。その間多くの人達と出会い、その大切さ、喜びを感じ、元気をもらった貴重なひとときでした。これからも皆様に感謝しつつ活動していきたくと思っています。
川島恭子

ボランティア活動に参加させていただいてまだ2年目ですが諸先輩の皆様を見より見真似で今ではすっかり現場に慣れてきました。ボランティアの仲間に入った頃は活動への参考にと院内図書をいろいろ読んでみましたが現場での具体的な行動への答えは得られませんでした。まずはやってみるしかないと考えて自分自身が自然体でいろいろな話題で患者様や付添いの家族の皆様との会話を積極的に心掛けています。そこで少しでもお互いが自然に明るい笑顔で話し合えたときは心からこのボランティアに参加させていただいたことに感謝しています。これからも社会の風を空気をこのホスピス病棟に持ち込めるよう努めてまいります。また毎週お会いするボランティアの仲間や病院スタッフの皆様とご一緒に活動できるこの時間は私にとって社会参加ができる非常に大切な機会になっていると思います。これからももっとホスピス病棟で存在感のあるボランティアスタッフを目指して頑張りますのでよろしくお願い致します。

板東宏明

◆◆◆ ボランティア活動 ◆◆◆

1. ティーサービス・・・毎水曜・金曜日



水曜日ティーサービス



金曜日ティーサービス



お花見

2. ホスピスガーデンの花壇の管理・・・季節の草花の育成

ボランティアさんによって手入れされた花壇の前で春のお花見や、秋のホスピス緩和ケア週間の前夜祭

3. 季節のイベント・・・

患者・家族の皆さまに季節感を味わっていただくため、緩和ケア病棟では、1月お正月飾り、2月節分豆まき、3月ひな祭り、4月お花見、5月お節句、7月七夕、8月、お盆阿波踊り・花火大会、9月お月見、12月クリスマス・餅つき大会などをボランティアとスタッフが協力して楽しく開いています。



3 月



5 月



5 月



8 月



12 月



12 月

4. 緩和ケアラウンジでの演奏会・・・ボランティアの皆さまによる音楽会



ピアノとフルートのコンサート
大江浩志さん



和楽器による新春演奏会



ハワイアン・フラダンス
徳島ハニー・カマイナス



徳島混声合唱団



阿波人形浄瑠璃
大谷旭源之丞座



ソプラノ独唱
乗松恵美さん

5. ホスピスエントランスのギャラリー展



制作：

徳島新聞カルチャーセンター講師

内藤久子様

ボランティア 芝 麗子様

制作には3ヶ月から、半年もかかる作品もあるそうです。作品集の中央にあるメインタペストリーはLED電球を使った縦170cm×横143cmの超大作です。

NPO法人ホスピス徳島がん基金

2002年4月、医療法人若葉会近藤内科病院に徳島県で初めて緩和ケア病棟「ホスピス徳島」が開設されました。開設にあたって、患者・家族の皆様から多額の寄付金を頂きました。この寄付金を原資にして「ホスピス徳島がん基金」を設立しました。わが国では2007年4月にはがん対策基本法が施行され、この法律のひとつにホスピス緩和ケアの普及・推進が盛り込まれております。2007年11月にはがん基金は「特定非営利活動法人ホスピス徳島がん基金」に発展いたしました。この基金はがん対策基本法と同じ方向性であり、ホスピス徳島がん基金の活動は地域社会におけるホスピス緩和ケアの普及、患者さん・ご家族のQOL向上のための活動を更に広めていく事としています。

今後地域社会においてホスピス緩和ケアに関する様々な活動を行ってまいります。

◆ 事業内容 ◆

- ① ホスピス緩和ケアの啓発・普及活動
- ② ホスピス緩和ケア教育・人材育成
- ③ がん患者の在宅支援、在宅におけるホスピス緩和ケアの提供
- ④ がん患者会の運営等に関する協力
- ⑤ ホスピス徳島の環境整備
- ⑥ ホスピス・ボランティア人材育成
- ⑦ がん治療に関わる人材育成
- ⑧ ホスピス緩和ケアに関するその他の事業

◆ ホスピス徳島がん基金活動 ◆

1. ホスピス緩和ケア週間 in Tokushima
2. 徳島がん市民セミナー等の開設
3. 医師・看護師・臨床心理士・学生のホスピス緩和ケア研修
4. 緩和ケア病棟「ホスピス徳島」の環境整備
5. ホスピス認定看護師の育成等、職員の緩和ケアに関する研修
6. ボランティア活動の支援
7. お茶会やミニコンサート等ホスピス徳島内の各種イベントの運営
8. 患者会の運営補助
9. その他

徳島がん市民セミナー

徳島がん市民セミナーは、がんの早期発見・がん治療・ホスピス緩和ケアをテーマとして、平成19年9月から平成24年8月現在までに7回開催しています。セミナーを通じて、県民のみなさまにがんに関する情報の提供をし、ホスピス緩和ケアについての啓発・普及する活動を行っています。

◆◆◆ 第1回徳島がん市民セミナー ～地域格差の是正を目指して～ ◆◆◆

日時 平成19年9月2日（日）午前10時～午後1時

場所 徳島大学蔵本キャンパス長井記念ホール

「がん対策基本法の施行について」 —厚生労働省 がん対策推進室室長補佐 木村慎吾先生

「安心してがん治療を受けるために」

—日本臨床腫瘍学会がん薬物専門医会代表 千葉大学呼吸器内科 滝口裕一先生

「町の中のがん専門医」 —横浜労災病院 腫瘍内科部長 有岡 仁先生

◆◆◆ 第2回徳島がん市民セミナー ◆◆◆

日時 平成20年9月28日（日）午前10時30分～午後12時30分

場所 よんでんプラザ 3階 ヨンデンホール

「ホスピス緩和ケアの心と実践」

—近藤内科病院 緩和ケア病棟[ホスピス徳島] 病棟長 荒瀬友子先生

「生と死を見つめて共に生きる」

—六甲病院 緩和ケア病棟 チャプレン・カウンセラー 沼野尚美先生

◆◆◆ 第3回徳島がん市民セミナー ◆◆◆

日時 平成21年3月8日（日）午前10時

場所 徳島県医師会館

テーマ：がんの早期発見・治療

「乳がんの早期発見について～乳がんで死なないために～」

—松江赤十字病院 乳腺外科部部長 村田陽子先生

「大腸がんで死なないための専門医からのアドバイス

～房総における大腸内視鏡検診25年の経験から～」

—医療法人鉄蕉会 亀田メディカルセンター幕張 統括院長 光島 徹先生

◆◆◆ 第4回徳島がん市民セミナー ◆◆◆

日時 平成21年9月27日（日）午前10時00分～午後12時30分

場所 ホテルクレメント徳島

「がんになって、思うこと、生きること」

—滋賀県立成人病センター 緩和ケア科 主任部長 堀泰 祐先生

「ホスピスで学ぶ生き方」 —六甲病院 緩和ケア病棟 チャプレン・カウンセラー 沼野尚美先生

◆◆◆ 第5回徳島がん市民セミナー ◆◆◆

日時 平成22年3月14日（日）午前10時00分～午後12時30分

場所 ホテルクレメント徳島

「乳癌の治療～最新情報を中心に～」 —川崎医科大学 乳腺甲状腺外科教授 園尾博司先生

「がんは克服できるか～化学療法の役割～」 —三沢市立三沢病院 院長 坂田 優先生

◆◆◆ 第6回徳島がん市民セミナー ～がん患者と医療者の集い～ ◆◆◆

日時 平成22年9月26日（日）午後1時～午後3時30分

場所 徳島大学蔵本キャンパス 長井記念ホール（入場無料）

・講演

「がん撲滅に向けた患者支援団体・行政機関・医療関係者のコラボレーション：

米国NPO臓器がんアクションネットワーク」

—パンキャンジャパン代表 眞島 喜幸 氏

・パネルディスカッション

患者代表：がんフレンド勢井啓介さん、ひまわり坪田明子さん、あけぼの会宮城慶さん

医療者代表：徳島県立中央病院、徳島大学病院、徳島赤十字病院、徳島市民病院 各院長

行政：石本寛子徳島県医療健康総局次長

コメンテーター：仁木博文衆議院議員

◆◆◆ 第7回徳島がん市民セミナー ◆◆◆

日時 平成24年8月19日（日）午後1時～午後3時

場所 徳島大学蔵本キャンパス 長井記念ホール

「ホスピス緩和ケアにおけるケアリング～人生を生き抜く人に寄り添う～」

—淀川キリスト教病院看護部 田村恵子先生

「在宅ホスピス緩和ケア—ケアタウン小平の取り組み」

—ケアタウン小平クリニック 山崎章郎先生

～地域格差の是正を目指して～

「がん対策基本法の施行について」
—厚生労働省 がん対策推進室 室長補佐 木村 慎吾先生

「安心してがん治療を受けるために」
—日本臨床腫瘍学会がん薬物専門医会代表 千葉大学 呼吸器内科 瀧口 裕一先生

「町の中のがん専門医」
—横浜労災病院 腫瘍内科部長 有岡 仁先生

講演の後、がん薬物療法専門医によるセカンドオピニオンも予定しております。

9月2日（日）午前10時～午後1時

徳島大学蔵本キャンパス 長井記念ホール

主催：日本臨床腫瘍学会、ホスピス徳島協会の会
NPO法人徳島マンモグラフィ委員会、徳島のがん治療を良くする会

第1回徳島がん市民セミナー

第7回
徳島がん市民セミナー

日時 平成24年8月19日（日）午後1時～午後3時
場所 徳島大学蔵本キャンパス 長井記念ホール

・講演1
「ホスピス緩和ケアにおけるケアリング
～人生を生き抜く人に寄り添う～」
講師 淀川キリスト教病院看護部 田村 恵子 先生
座長 徳島県看護協会会長 水口 聡子 先生

・講演2
「在宅ホスピス緩和ケア
—ケアタウン小平の取り組み」
講師 ケアタウン小平クリニック 山崎 章郎 先生
座長 近藤内科病院緩和ケア病棟長 荒瀬 友子 先生

主催：NPO法人ホスピス徳島がん協会、医療法人若葉会近藤内科病院

ホスピス緩和ケアにおけるケアリング—人生を生き抜く人に寄り添う—

淀川キリスト教病院看護部 田村 恵子

「がん対策基本法」に基づく「がん対策推進基本計画」の重点事項に「治療の初期段階からの緩和ケアの実施」が掲げられ5年の月日が経過しました。しかし、人々の間には「緩和ケア」は生の終わりを意味するとの考えが根強く、適切な時期に緩和ケアにアクセスできていないことが多いのが現実です。

私が働くホスピスでケアを受ける方々は治癒の見込みがないと診断された進行がんの状態であり、日々の生活にも他者の力が不可欠であり、衰えていく身体を通して死を間近に感じておられます。この先どうなっていくのかとの不安や、死が避けられない状態であることに怖さを覚えています。一方、ご家族はできることならよくなってほしいと願いつつも、衰えてゆく患者さまを目の当たりにして、できる限り苦痛なく穏やかに、しかも一日でも長く生きてほしいと一縷の望みを持ち続けています。ホスピスでは、こうした患者さまとご家族の苦しみを、全人的な痛み（Total Pain）—身体的、精神的、社会的、そしてスピリチュアルな痛みが複雑に絡み合っている苦悩—の視座から捉えてケアを行い、最期の時まで“その人である”生き方ができるよう支えています。死を病気の結果としてではなく、あくまでも正常な人の営みとして捉えて最期の瞬間まで生を支え続けているのです。そして、その場に居合わせる私たちは、職業としての看護師ではなく、有限の生を生きる一人の人間として、その息遣いに寄り添いながら、その人生を生き抜くさまを間近で見せていただいています。

ホスピスとは、いつかは死すべき私たちが死との対峙を余儀なくされたとき、死から生へのまなざしを、弱さの中にしなやかさを身につけて、最期まで生きることを支えるケアを意味しています。ホスピスでのケアについての理解を深めていただくことを通して、改めて死を視座において生きることを考える機会にさせていただけることを願っています。

「在宅ホスピス緩和ケア—ケアタウン小平の取り組み」

ケアタウン小平クリニック 山崎章郎

ホスピス医としての14年間の経験を通して、様々なことを学んだが、全人的ケアであり、チームケアであるホスピスケアは生命を脅かされる困難に直面し、どうしてよいか分からずに途方にくれたり、生きる意味を見失って早く死にたいと考えながら生きている人々の大きな力になれることを学んだ。そしてホスピスケアの本質はスピリチュアルケアであると確信するようになった。

そのホスピスケアを、地域の中で、末期がん患者にも、非がん患者にも提供するべく、2005年10月、訪問診療・訪問看護・訪問介護事業所などを一か所に集約させたケアタウン小平を開設した。在宅ホスピス医として、多くの患者を在宅で看取るなかで、施設ホスピスでは見えにくかった、在宅という場の持つ力、在宅で介護・看病する家族の力、地域の力などが見えるようになってきた。

そして、今は可能であれば、人生の最期は病院や施設の中ではなく、その人が生きてきた地域の中で、家族や地域の人々と共に過ごすことがベターなのだと考えるようになった。在宅での死は、亡くなる人が、ただこの世から消えていくのではなく家族にも、地域にも色々なものを残していくことができるチャンスだと思える。あるいは、お互いに助け合いながら生きる地域社会の再生にも発展し得る。今回の講演では、そのケアタウン小平の取り組みをご紹介した。

死という人生最大のイベントを病院に委ねてしまうのはもったいないと考える。孤立社会とも無縁社会とも言われる現状の中で、多死社会を迎えつつある今、スピリチュアルケアを本質としたホスピス緩和ケアを核に、最期まで在宅で過ごせる地域社会の創設は急務であるとする。

第26回日本臨床内科医学会～市民公開講座～

市民公開講座をNPO法人ホスピス徳島がん基金が共催しました。市民公開講座での写真、会長あいさつ、総合司会をされた坂東正章先生の県医師会報への投稿原稿などを掲載します。また、市民の皆さまからのアンケート結果を報告します。



柏木哲夫先生とスタッフ

あいさつ

徳島県臨床内科医会 会長

第26回日本臨床内科医学会実行委員長 近藤 彰

徳島県民のみなさまこんにちは。

今日は第26回日本臨床内科医学会の市民公開講座「いのちに寄り添う」によるこそ参加くださいました。ありがとうございます。徳島新聞社の協力で市民公開講座の案内をいたしましたところ、なんと1,030名と多数の参加申し込みがございました。そこでやむなく抽選をいたしました。今日参加のみなさまは籤運のある幸運な方々です。おめでとうございます。

さて日本臨床内科医会でございますが、おもに内科の開業医を中心にして全国18,000人の会員で構成されております。ちなみに徳島は240名の会員数です。その活動は、適正な保険診療についての活動、全国を18,000名の極めて多数の内科医が参加する臨床研究(インフルエンザ研究・アスピリンの脳梗塞予防の研究・高血圧症での原発性アルドステロン症発症頻度の研究)などです。

徳島で開催された本学会は7日8日の2日間、全国から1,000名を超える会員の参加者がありました。2日間にわたって本学会のメインテーマ「いのちを支える地域医療の再生」に沿って討議が行われました。シンポジウムでは1) 東日本大災害から地域医療は立ち直れたのか。2) 地域医療での女性医師の役割について、3) 病院から在宅へ(がん・認知症患者)などで熱い討議を行いました。さらにパネルでは国民皆保険は堅持できるのかについて、さきほどまでディスカッションいたしました。

この市民公開講座を企画するに当たっては柏木哲夫先生にご尽力いただきました。2年半前に柏木先生に講演をお願いしたところ、快くお引き受けいただいたばかりか徳永進先生とのコラボレーションを提案していただき、そして市民公開講座のタイトルを「いのちに寄り添う」としていただきました。このようなわけで、この市民公開講座は本学会のテーマである「いのちを支える地域医療の再生」を大きく膨らませる本学会の最期を飾るのにふさわしいセッションになりました。

私たち内科医は、県民の皆さまと一緒に徳永進先生と柏木哲夫先生の講演・対談を拝聴し、医者原点に思いを巡らして明日からの臨床の現場での熱意と知恵を学びたいと思っています。

市民公開講座「いのちに寄り添う」を担当して

坂東ハートクリニック 坂東 正章

第26回日本臨床内科医学会の最終プログラムとして、市民公開講座「いのちに寄り添う」が、あわぎんホールで開催された。その総合司会を担当したが、よい経験をさせてもらった。

講師は野の花診療所（鳥取）の徳永進先生と、淀川キリスト教病院を退職され現在は金城学院学院長を務める柏木哲夫先生であった。終末期医療に関してお二人とも高名であり、公開講座を準備する我々自身も講演が楽しみであった。

会場が閑散としていては招請した先生方に失礼であり、たくさんの県民にきていただこうと、新聞広告のみならず、臨床内科医会会員が自院でパンフレットを配ったり、患者さんに声がけをしたりで、公開講座への応募総数は1,020人に達した。講演内容が良いため、当日のキャンセルは一割前後と判断し、講演当日の学会員参加も予測して844枚の入場整理券を発送した。

公開講座当日、控え室で講師の先生お二人と挨拶がてら、しばらく談笑する機会があった。その際、徳永先生が「無料の招待券を発送した場合、普通は3割程度のキャンセルがある。学会の市民公開講座では満席などと言うことはないでしょう。」と言われたが、蓋を開けてみると当日は「隣の座席に荷物を置かぬよう、詰め合わせて」とアナウンスしなければならぬほどの盛況であった。

徳永先生は「ぶらっと往診」と題して、在宅での終末期医療を積極的に推し進める姿勢を強調された。先生独特の鋭い、かつ感受性豊かな観察眼で、在宅の患者さんを暖かく見守る診療が手に取るように伝わってきた。自宅での臭い、色、漂う空気等々、どれを取ってみても病院ではとても提供できない、と言われる。ある患者さんが野の花診療所に入院したものの、トイレが使いにくいと訴え、在宅診療に切り替わった由。診療所には最新式のトイレ設備が備えられているのに、なぜ？と思って往診した折、疑問が解けた。その家のトイレは「朝顔」と呼ばれる旧式で、非常に簡単な便器であり、色も黄ばんでおり、アンモニア臭もあった。「(診療所の最新トイレが)これに負けた…」と先生は述懐された。ことほど左様に、患者さんにとって自宅の快適さに勝るものはなく、在宅での終末期医療をこれからも推進するといわれた。

言葉にすれば簡単だが、実際の終末期医療では精神的、肉体的に非常に疲れることと思う。またマンネリ化もしそうだが、徳永先生は「常に新しいことを発見するようにしている」と言われた。先生はその著作で「死の回りには本当がある」とも書かれていたが、「新しい、本当のこと」にアンテナを張りめぐらせていれば、同じように見える診療の中にも新たな発見があり、マンネリという言葉とは無縁の診療になるのだろうと思った。

先生の感受性を示すエピソードに、「物事に名前を付ける」ということがあった。彼岸花は毎年、決まった時期、場所に咲く。曼珠沙華という別名もあるが、先生は彼岸花に対して「約束花」「謙

虚花」と命名していた。「決まった時期に毎年咲いてくれる」「道ばたやあぜ道など、控えめな場所に咲き、出しゃばらない」こういった見方で彼岸花を前述のように呼んでいる。「聴診器」を「聴心器」と書き間違える人がいるが、その方が聴診器の本質を示していて、良いかもしれない。柏木先生は日本で初めてホスピスプログラムを開始されたが、穏やかさ、暖かさの中にも非常にどっしりした印象を与える方であった。

「死を背負って生きる」と題して講演された。「死が近づいてくる」という刑死前の吉田松陰の言葉を引用され「生と死との距離感を述べる人がいるが、実は我々は常に死を背負って生きているのであり、ひとひらの紙が風に舞うように、それまでは『表の生』であっても、いつ『裏の死』に変わるか、わからない」と切り出された。

著書でも「矢先症候群」という用語を提案されている。「子供達が皆独立して、夫婦揃ってゆっくりと温泉へでも行きたい、と思っていた矢先に、妻が癌で倒れました」先生は実臨床で2500人の看取りをされているが、このように、いつ「表」から「裏」に変わるかわからないということを骨身に沁みて感じておられ、それを規範として自らの人生を歩んでこられた様子が見て取れた。「人は生きてきたように死んでいく」とも述べられた。周囲の人に感謝して生きてきた人は、家族に、また医療者にも感謝の言葉を述べながら死んでいくが、文句や無理ばかり言ってきた人は、そのような死に方をすると。しかし「最後の跳躍」で、これまでの人生態度を変え、感謝をして死んでいく人もあったと言われ、そのためのポイントは家族との和解や深い自省であると指摘された。

お二人の対談もあり、それぞれの考えや体験を交えて、楽しいトークが繰り広げられた。楽屋での一コマであるが、柏木先生が徳永先生のハードな仕事振りを心配され、「徳永先生も、もうむちゃくちゃ若くないのだから、身体には気をつけて…」と言われたところ、「『もう若くないんだから』という代わりに、柏木先生はそのように表現される。それがうれしい。」と応えられた。このような言葉のやりとりをされる先生方の講演は、本当に心に響くものであった。

今回の講演を拝聴し、考えたことがある。終末期医療はいつ、誰に必要となるかわからないが、例外なくすべての人が直面する。自分の終末期医療をどのようにしたいのか、その意思表示を自院の患者さんにも勧めようと思う。徳島県立中央病院が非常に良くできたりビングウィルの小冊子を発行されている。こういったものを利用して、患者さんのみならず、我々医療者も、誰一人として逃れることのできないこの終末期医療にどう対応するか、自分の意思表示ができる状態で決めておくよう、勧めていきたいと思う。

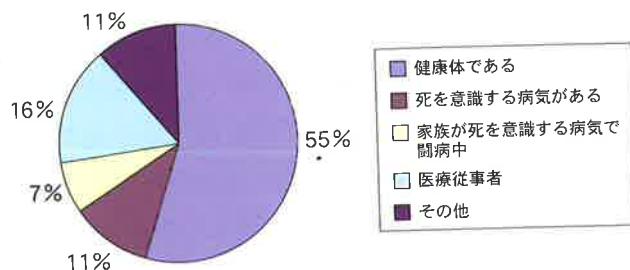
◆◆◆ 市民公開講座に関するアンケート集計結果 ◆◆◆

回答数件509／参加者800名（回答率：64%）

I. あなたについてのお尋ねです。どれか一つをお選び下さい。

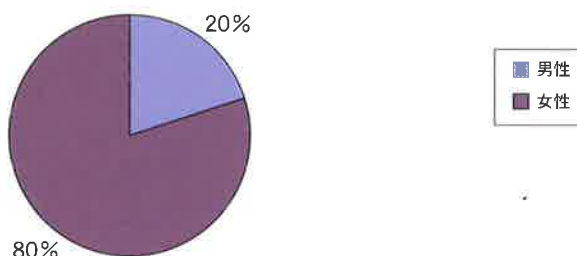
1. 健康体である 死を意識する病気がある
家族が死を意識する病気で闘病中
医療従事者 その他

健康体である	281
死を意識する病気がある	58
家族が死を意識する病気で闘病中	37
医療従事者	79
その他	54

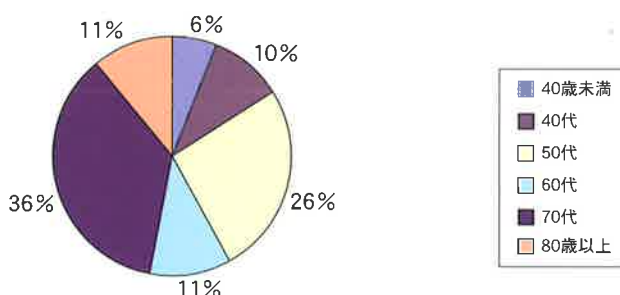


2. あなたの性別、世代をお教え下さい。

男性	86
女性	386



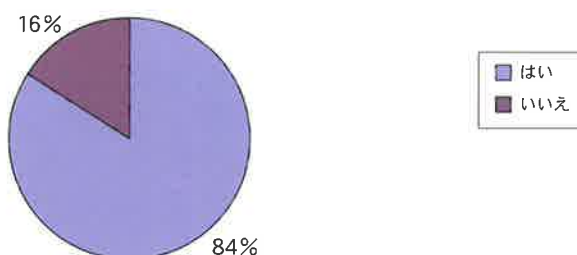
40歳未満	24
40代	38
50代	98
60代	44
70代	135
80歳以上	44



II. 終末期医療（人の命が消えようとする時期の医療）についてお尋ねします。

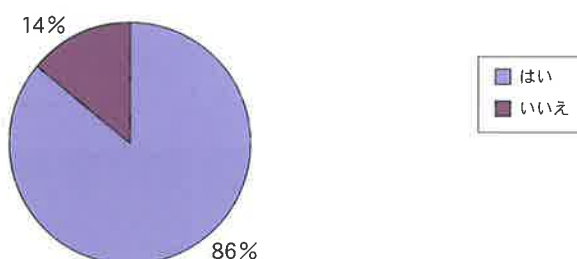
1. あなた自身の終末期医療に関して、考えたことはありますか？

はい	412
いいえ	77



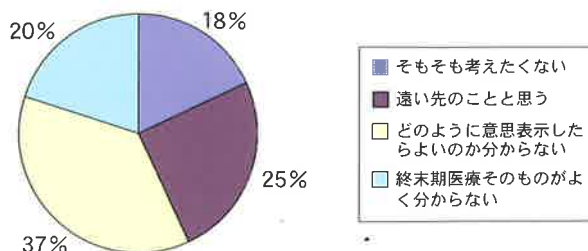
2. 家族の終末期医療について考えたことはありますか？

はい	497
いいえ	80



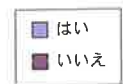
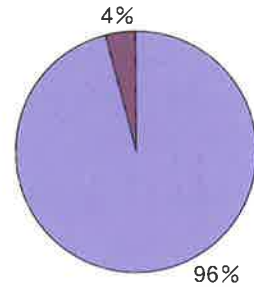
3. 終末期医療について考えたことがない方にお尋ねします。考えたことがない理由であな
たの気持ちに近いものはどのようなことでしょうか？

そもそも考えたくない	16
遠い先のことと思う	23
どのように意思表示したらよいか 分からない	34
終末期医療そのものがよく分からない	18



4. 「自分の終末期医療ではどのようにして欲しい」という意思表示ができる方法があれば、そうしたいと思いませんか？

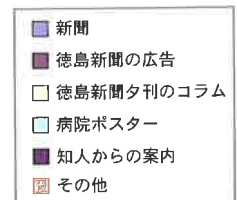
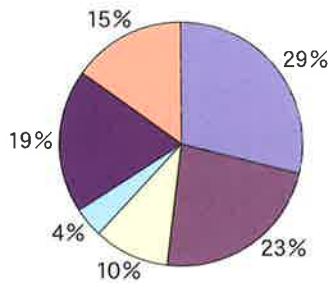
はい	439
いいえ	16



Ⅲ. 市民公開講座についてご意見をお聞かせ下さい。

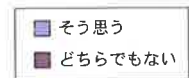
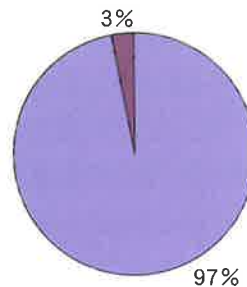
1. 今回の公開講座に出席しようと思ったきっかけは何でしょうか？

新聞	159
徳島新聞の広告	125
徳島新聞夕刊のコラム	51
病院ポスター	20
知人からの案内	99
その他	79



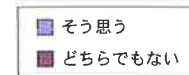
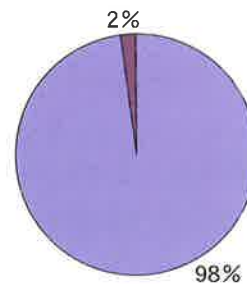
2. 今回の講座内容は有益であった。

そう思う	407
どちらでもない	12



3. 講演の内容は理解しやすかった。

そう思う	546
どちらでもない	13



ホスピス緩和ケア週間 in Tokushima

10月の第1週の土曜日が「世界ホスピスデー」です。わが国では、そのあとの日曜日から1週間全国各地でホスピス緩和ケア週間として様々なイベントが行われています。2007年から、徳島では近藤内科病院とNPO法人ホスピス徳島がん基金が協同して「ホスピス緩和ケア週間in Tokushima」を開催しています。

～前夜祭 野外コンサート～



合唱団「鸞」



津田祭り太鼓



徳島交響楽団ジャズバンド



阿波人形浄瑠璃



大谷旭源之丞座



オレンジバルーンの配布

～パネル展～



パネル展は、近藤内科病院、徳島大学病院、徳島県立中央病院、徳島市民病院、徳島赤十字病院、ふれあい健康館、徳島県庁、スーパーセンターマルナカ徳島店で開催しました。

ホスピス緩和ケア週間 in Tokushima 2012

ホスピス緩和ケア週間 in Tokushima 2012

10月6日は「世界ホスピスデー」です。これにあわせて、日本ホスピス緩和ケア協会では10月6日～10月13日
に「ホスピス緩和ケア週間」とし、全国のホスピスでは様々なイベントが開催されます。遠隔地では「ホスピス
緩和ケア週間 in Tokushima 2012」として下記のイベントを開催します。皆様是非ご参加ください。

前夜祭 野外コンサート

日時 平成24年9月29日(土) 13:30より

場所 近藤内科病院 ホスピス緩和ケアガーデン

*雨天の場合は緩和ケアラウンジに変更

内容 ①阿波人形浄瑠璃：大谷旭源之丞座

「傾城阿波の鳴門～順礼歌の段～、～十郎兵衛内の段～」

②津田祭り太鼓：津田小学校

③ジャズバンド：徳島交響楽団



ホスピス緩和ケア パネル展

日時 平成24年10月6日(土) 場所 スーパーセンターマルナカ徳島店・徳島飛行

～10月13日(土)

*日時は展示場所により若干異なります

徳島大学病院・徳島赤十字病院・徳島県立中央病院
徳島市民病院・近藤内科病院

主催：NPO法人ホスピス徳島がん基金、近藤内科病院
共催：徳島県、徳島大学病院、徳島赤十字病院、徳島県立中央病院、徳島市民病院



阿波人形浄瑠璃：大谷旭源之丞座



津田祭り太鼓：津田小学校

配布チラシ



スーパーセンターマルナカ徳島店でのパネル展



独唱：斉藤和子さん



近藤内科病院でのパネル展



ジャズバンド：徳島交響楽団

WHO（世界保健機構）

緩和ケアとは、生命を脅かす疾患による問題に直面する患者とその家族に対して、痛みやその他の身体的、心理的、社会的な問題、さらにスピリチュアル（宗教的、哲学的なところや精神、霊魂、魂）な問題を早期に発見し、的確な評価と処理を行うことによって、苦痛を予防したり和らげることで、QOL（人生の質、生活の質）を改善する行為である



発行日
発行者

平成24年11月
医療法人若葉会 近藤内科病院 広報委員会
NPO法人 ホスピス徳島がん基金

